Ｄ－１　成果と課題

４．研究の成果と課題

（１）成果

①．教師がこだわりをもって地域教材や具体的人物教材を開発することで、具体を通した学びを展開し、子ども達が主体的に追究活動を行うことができた

水産業の学習では、志賀町の栽培漁業センターに教師が足を運び、職員の方のお話や施設の見学を行う中で、子ども達につかませたい見方・考え方を構築していった。教師自身が何度お願いしても、頑なにヒラメ棟への立ち入りを断られた経験を中心課題に位置づけた。実際にセンターに見学に行くことができなかったが、子ども達は具体的資料を通して、栽培漁業の難しさや職員の方々の思いや願いを考えることができた。さらにセンター部長の永田さんと育成途中のヒラメを子ども達に出会わせたことも、追究活動の原動力となった。

自動車の学習では、校区内にある使用済み自動車のリサイクル工場への見学で、近藤社長のお話や目の前で大きな音を立てて解体される使用済み自動車の姿、油まみれになりながらも部品一つ一つを丁寧に解体する働く人の姿など、子ども達は、新たな発見や驚きと共に感動している様子であった。幕末・明治維新の学習では、大久保利通という明治政権樹立の立役者を中心に取り上げ、幕末・維新の激動の時代を具体的に学ぶことができた。さらに元武士でありながら、武士の特権階級をなくす廃藩置県という大改革を中心課題として取り上げ、改革断行の裏に隠された大久保の苦悩に迫ることで、時代像を具体的に捉えさせることができた。

具体的事象をもとにした課題意識、その課題を解決するための具体的な調べ活動によって、子ども達は高い意欲を維持しながら学習を行った。

②．既習との違い、新たな事実の提示、資料の比較など具体的な支援による課題意識の芽生えから、学習課題を設定することができた

水産業の学習では、日本の漁獲量が年々減少してきているという既習とのずれと、その問題を解決するいい方法として栽培漁業があり、さらにその施設が石川県にもあるという新たな事実を提示することで、課題意識を芽生えさせ、次全体を貫く学習課題を設定することができた。自動車の学習では、日本の自動車保有台数と使用済み自動車の増加数という新たな事実、さらに95%という高い率での再利用に成功した工場が校区内にあるという事実を重ねて提示することで、その工場に関心を向けさせ、次全体を貫く学習課題を設定することができた。幕末・明治維新の学習では、脇に刀を携え和服に身を包んだ武士・大久保の姿と、シルクハットを手に持ち髭を生やしたスーツ姿・大久保の写真を比較、さらにそれが同じ人物であり、それらの間がわずか４年であるという事実の提示、またその間には江戸幕府の崩壊という大きな出来事があったという事実を認識することで、小単元全体を貫く学習課題を設定することができた。

生活経験や既習といった子ども達の実態を的確に捉えた上で、驚きや新たな疑問が自然と沸き起こるようにするにはどのような事実と出会わせるのがよいのか、さらにそこで生まれた課題意識をクラス全体として共有化するにはどうしたらよいかなど、様々な支援の方法を実践を通して学ぶことができた。

③．ふり返りを生かした学習展開を取り入れることで、子ども同士の交流や学習の連続性を生み出すことができた

毎時間のふり返りをただ書かせるだけでなく、様々な方法で活用していくことに、いくつかの効果があることを実証することができた。まずは、教室掲示に子ども達直筆のふり返りを貼っていくことで、自分の考えとの比較を促す資料として活用できたことである。また幕末・明治維新の学習では、授業の導入で前時のふり返りを紹介することで、前時を子ども達自身の言葉で想起させると共に、本

時の学習課題を設定するための資料として活用することができた。
　ふり返りはその時間の学習をまとめるだけではなく、子ども達同士の思考の交流を促すものとして、また次時への意欲の継続や、新たな学習課題設定の手がかりとなり得ることを学んだ。

（２）課題

①．具体と抽象のバランス

　地域教材や具体的な人物教材を開発したことで、子ども達の追究意欲を沸き起こさせることはできた。しかし、ここで注意しなければならないことは、具体のままで終わらないということである。水産業の実践でいえば、志賀町の栽培漁業センターの仕組みや役割を学ぶ学習、センターの永田さんの仕事を学ぶ学習で終わってはいけないと考える。第５学年の社会科は、日本の産業の姿を学ぶ学習であるので、志賀町の栽培漁業センターやそこで働く人々の姿を通して、日本の水産業の姿を捉えさせなければならない。
　第５学年では、地域教材による具体的な学習を通して、日本の産業学習ができるよう、また第６学年では、具体的な人物教材による学習を通して、その時代像がつかめるようにしなければならない。具体から抽象、抽象から具体へと学習が適宜、展開していくように小単元を計画する必要がある。つまり、『具体と抽象のバランス』である。この視点で今回の実践をふり返った時、果たして抽象化ができていたか、指導要領の定める各学年の目標に子ども達の姿が到達できていたか、検討する必要がある。

②．課題意識の高揚　⇒　課題意識の共有化　⇒　学習課題の設定　までの展開のスリム化

　幕末・明治維新の学習では、「学習課題は子どもの言葉を紡ぎ合わせて設定させるもの」という意識を強く持ち過ぎた余り、課題設定までに多くの時間を費やし、思考を深める後半の展開に十分な時間を取ることができなかった。
　学習課題の設定には、個々の課題意識の高揚と、それがクラス全体のものとして共有化されることが大切である。しかし個々に課題意識を持たせることはできても、それがなかなか共有化できないままに課題を設定してしまうことが往々にしてある。意図するねらいに到達するためには、課題設定までの場面に教師が主導的に関わることで、課題意識の共有化を図り、効率よく課題を設定し、その後の話し合いに十分な時間をとることも場合によって必要である。

③．子どもの考えの微妙なズレや違いを聞き分けられる力

　自動車の学習では、見学で調べたことを話し合うことで、危険できつい作業にも関わらず、前向きに日々仕事に励んでいる人々の思いや願いに迫る展開を考えた。学習の終盤で、真っ白な新品の軍手と、オイル塗れの真っ黒な軍手を提示することで、作業の大変さを実感させることはできた。しかし、見えない事実である働く人々の思いや願いにまで子ども達の意識を深めていくことができなかった。その原因は話し合いの過程において、教師が子どもの発言の違いや発言内容の真意を捉えることができなかったことにある。
　子ども達の発言には、一見同じように聞こえるものであっても、それぞれの思いに微妙な違いがあり、考えの根拠とした事実に違いがある場合が見られる。それらを的確に聞き分け、板書に計画的に位置づけ分類していくことで、子ども自身が互いの考えの相違点や矛盾点に気づき、新たな展開へとつなげられるようにしていきたい。

④．実践した授業の本校のカリキュラム上への位置づけ

　今回の３つの実践は、教師自身が足で見つけ開発した授業であった。この実践を今回限りのもの、教師本人だけのもので終わらせてはいけない。実践の積み重ねによって本校独自のカリキュラムが作成されていくことが、実践することの本来の意味といえるだろう。そのためには、実践した小単元構成を一般化すること、使用した資料やワークシートを加味修正、蓄積していくことにより学年内で共有化し、いつでも使えるような状態にしておくことが必要である。
　本校の子どもの実態に即した実践であるからこそ、毎年行われる授業になるよう、実践の見直しと蓄積をしっかりと行っていくことが大切である。